

障がい者が安心して能力を発揮できる特例子会社 「日東精工SWIMMY」を ご紹介します



檀野佳子社長(日東精工SWIMMY株式会社玄関前で)

障がい者雇用のためにつくられた特例子会社「日東精工SWIMMY株式会社」。
今秋には京都府から「はあとふる企業」に認定されています。
昨年9月に設立し、今年1月に事業をスタートしてから
1年を迎えようとしています。会社の現況、そして今後めざすところについて、
代表取締役社長檀野佳子が紹介いたします。

～日東精工SWIMMYはどんな会社でしょう？

障がい者が安心して能力を発揮できる環境を提供する特例子会社です。従業員が1000人なら22人というように、企業の規模に応じて障がい者を雇用することが国で定められています(法定雇用率)。特例子会社の場合、その障がい者が親会社に雇用されているとみなされ、法定雇用率を算定できます。親会社にとって障害者雇用を進めやすくなるということです。

また、「福祉就労から一般企業へチャレンジしたい」「自分を成長させたい」と、そんな障がい者の勇気を後押しできる会社でありたいと考えています。

～まずは障がい者雇用を促進する、新たな就労の場をつくったということですね～

人種や国籍、性別、学歴などの「多様性」のひとつとして、障がい者それぞれの経験や能力、考え方が認められ、活かされている状態が理想です。

障害者雇用促進法では、事業主に障がい者への「合理的配慮」を義務付けています。これは障がい者の個々のニーズに応じて、障がい者の能力の発揮を妨げる社会的障壁を取り除くことです。具体的には①物理的配慮(バリアフリーなど設備

面)、②意思疎通の配慮(筆談、手話、点字、わかりやすい表現など)、③ルール・慣行の柔軟な変更(勤務時間の変更や小休憩を挟む)などです。とくに②の意思疎通は、個々のニーズが多様で、他人からはわかりづらく、本人自身も認識していないといった点で配慮がとても難しく、本人との信頼関係が重要です。外部のアドバイザーからは、「丁寧なマネジメントをなささい」「そこには必ず理由がある」「そこを丁寧に聞きだしなささい」とアドバイスを受けています。

特例子会社ではこういった「合理的配慮」をしやすくなりますから、職場定着につながりますし、障がい者雇用のノウハウも蓄積できます。「親会社の障がい者雇用の意識が薄れてしまう」「障がい者の業務が限定されてしまう」といった注意すべき改善点もありますが、障がい者雇用の会社であることが明確な特例子会社であるということで、



京都府では障がい者雇用の理解と促進を目的に「京都はあとふる企業」を認証しています。本年9月「日東精工SWIMMY(株)」が障がい者雇用を積極的に推進している企業として、この認証を受けました

障がい者が安心して働ける場所になるということです。

まだまだ理想通りといかない点もありますが、努力を積み重ねて理想に近づいていくしかありません。本人はもちろん、家族、外部支援者、地域の福祉関係の方々や信頼関係を築き、理想に近づけていければと思っています。

～どんな体制？ なにを目指していますか？～

障がい者6名（身体障がい者、知的障がい者、精神障がい者）で、フルタイム、週3日勤務、短時間勤務、始業・終業時間変更などフレキシブルな勤務体制をとっています。業務は社内便（郵便物）の仕分け・配達／機密文書のシュレッダー／保管文書のスキャニング、入力作業／ポリ箱の修正／プログラミングによるIT化推進／金属製品の面取り作業など多岐にわたります。

特性に応じた作業分担表をつくり、曜日や午前・午後で作業を変更するなどして、作業者の集中力の持続、リフレッシュ、仕事の可能性を広げることにつなげています。1週間単位、1ヶ月単位の出来高目標数値も見える化しています。

また、写真や図を入れた作業手順書の作成、治具・工具の作成など、その作業が可能になるよう



受付に花が飾られた明るく清潔な作業場。障がい者用のトイレも配慮し段差がないように設計されている／「日東精工SWIMMY」の社名はレオ・レオニの「スイミー」（好学社）が由来。たとえ小さな力でも個々の力が集まれば大きなことを成し得る、どんなものにも一つひとつに個性・役割りがあることを示唆する絵本で、世界中から愛されるロングセラー／障がい者一人ひとりが大切な存在であることの象徴として作業場に飾られたスイミーの絵2点（下左）

工夫をしています。採用基準やマネジメントプロセスの仕組み化と定着も図っていますが、これは、障がい者が安心して働ける環境を提供するために必要最低限のものであり、障がい者雇用のマネジメントを一定水準で行えるようにすることが目的です。他にもKYT（危険予知訓練）を従業員だけで行ってもらい、ここから従業員のリーダーシップとフォロワーシップの両方を醸成したいと考えています。

いまは日東精工グループ内からの仕事がメインですが、自治体など公的機関や他の企業からの仕事も増やしていきたいと思っています。みなさまの「生産性向上」「柔軟な働き方の導入」に当社（障がい者の能力、活躍）がお役に立てれば幸いです。

～なにかエピソードはありますか？～

会社を設立してから約1年が経過しましたが、社員同士が支えあって仕事をしています。得意分野には秀でていますので、教えてもらったり、助けてもらったりすることが多々あります。

同僚にやさしい人、家にある花をもってきて玄関前に飾ってくれる人、納品・配達に来られる業者の方やお客様に大きく元気な声で応対してくれる人、コツコツと集中して着実に仕事をこなしてくれる人、休んだ方の仕事をフォローしてくれる人、苦手な作業を克服しようと試みる人などなど、感謝する機会がたくさんあります。

また、「ICTを活用した野菜づくりをしたい」、「パソコンができるようになりたい」といった夢をそれぞれがもっています。

特例子会社ですが、一般の企業と同じく継続的に運営していかなければなりません。障がい者の特性や強みを活かして、いずれ日東精工SWIMMYならではの製品やサービスを生み出していくことができれば、従業員の喜びややりがいにもつながりますし、それが継続的運営と当社の利益にもつながっていくと思います。いろいろな方の理解と支援のもとで、日東精工SWIMMYを一步一步成長させていきたいと考えています。

異種金属結合「AKROSE」が 素形材産業技術賞で表彰

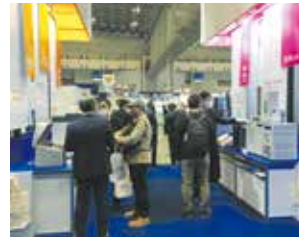
当社ファスナー事業部が開発した異種金属結合は、従来にない画期的な結合技術として各方面から高く評価をいただいておりますが、今般、「第36回 素形材産業技術賞表彰」で(一財)素形材センター会長賞を受賞し、業界誌「素形材」12月号(素形材月間特集号)で、AKROSEのことを詳細に紹介していただきました。また11月9日から12月11日まで経済産業省のロビーで「AKROSE」の製品が動画での解説とともに展示されました。



経済産業省ロビーでの展示(左)と記念式典で表彰

最先端科学・分析システム& ソリューション展「JASIS2020」に出展

当社連結子会社の日東精工アナリテック(株)は11月11日から13日まで幕張メッセで開催されたアジア最大級 分析機器・科学機器専門展示会「JASIS2020」に出展しました。新製品として、自動滴定装置GT310、自動試料燃焼装置AQF2100V、自動粉体抵抗測定システムMCP-PD600を出展し、昨年JIS K0102に採用になったフェノール・ふっ素・シアン・アンモニア用の小型蒸留装置などを紹介。参考出品として新型元素計を展示しました。また当社日東精工からもマイクロバブル発生装置や各種流量計も展示しました。



コロナの
ピンチにも
負けないで!

「受験生応援ゆるみ止めねじ」 今年も大人気です!

当社の樹脂用ゆるみ止めねじ「ギザタイト」を、ゆるまない=集中力持続のシンボルとして特別加工し、受験生にプレゼントするキャンペーンは、今年も12月1日に受付を開始し、すでにたくさんのご応募をいただいております。

前号でもご紹介しましたが『中学校』という中学校長先生向けの雑誌で、このキャンペーンを紹介したこともあり、全国の中学校の校長先生から直々にたくさんのお手紙をいただきました。

随時、お返事をさしあげたり、受験生応援ねじをお贈りすると、「三者面談で直接、担任から生徒と保護者に渡します」(大分県K中学校校長先生)と再度お手紙を頂戴したり、「人とのつながりの素晴らしさや、困難に立ち向かう強さ、やさしい心の

大切さのシンボルとしてプレゼントします」(北海道E中学校校長先生)といった声が届き、コロナ禍でいろいろ不自由があるなかで、教育者の方々が工夫をしながら前を向いておられる姿に、こちらが勇気づけられています。



2014年から開始したキャンペーンは、今年で7年目を迎えています。「上の二人の兄がお世話になったので、次はわたしの番です」「3年前に高校受験で第一志望に合格、今度は大学受験です。またお願いします」といったご応募もあり、続けていることで皆様に喜んでいただけることはうれしい限りです。個人でのお申し込みは3回に分けて受付。第1回の応募は締切らせていただきましたが、第2回は2021年1月6日、第3回は2月1日を予定しています。



常識的回答と実態のズレ

前

号本欄で「本も販売しているクスリ屋さん」を紹介しましたが、かつて週刊誌に「読むクスリ」というコラムがあり、1984年から長期連載され、その後、30冊以上書籍化されています。古本を開いて斜め読みしてみると「常識は変わる」という項目がありました。小学1年生のA夫くんが×だらけのテスト用紙をもって帰って来ようぼり。「ボクね、全部〇だと思ったのに全部×、どこがダメのかな」と言うので用紙を見ると「さかなをうっているのは?」「やさいをうっているのは?」「えんぴつをうっているのは?」という質問が並び、A夫くんは全部に「スーパ―」と書いてオール×だったのです。模範解答は「魚屋」「八百屋」「文房具店」だったのでしょう。先生が求める常識的回答とA夫くんの生活実態にはズレがある。このズレを×にするのは、か弱いそうだという話です。

今の時代なら、A夫くん、同じ質問に「Amazon」と答えるかもしれません。そもそもそのような質問をするところが成り立たないのかもしれませんが。今、20代、30代の方なら、自分が生まれる前の話なので、あまりピンとこないかもしれませんが、このコラムが書かれたのは戦後の高度成長期も終え石油ショックも経験し、いよいよバブル期に突入していくときです。「行け行け」といわれた、そんな高揚感溢れる時代でも、古い価値観にしばられている。常識は更新されていくべき」という話であったわけです。

「常識を更新する」という考えは、今でもビジネスの場でも共通のことです。たとえばかつてはFAXやメールを送った後、そのことを電話で確認するのが「常識」でした。私もそうですが、ある世代より上の者は相手の声を聞いて安心する・納得するというと

ころがあります。若い人ならそれは無駄と考える人が多いでしょう。

丁寧伝えるつもりで文章が、メールだと長くてまどろこっしいと敬遠される場合もあります。古いメールを利用して、古い標題のまま新しい内容を「返信」で送って来られる場合がありますし、第三者のメールを下にそのまま残した形で転送されたり……そんなことが気になる人もいれば、無頓着な人もいるようです。なにが正しいのか、どち

らを選べばいいか判断に迷うことも起こります。

上述の小学校一年生の問題文でいえば、先生が求める模範解答と、A夫くんの生活実態に合った答えがぶつかったわけですが、少なくとも今の我々には知恵があります。それが相手のことを思い、相手が望む意図を汲み取るように努力すること、それが常識を更新していくことです。私も「社長、それは古いですよ」と言われないうちに気をつけてまいります!

連載 33

あやべ ちょっと寄り道

ふるさと返礼品で
「ぼたん鍋」

大河ドラマ「麒麟がくる」でその人物像が見直されている明智光秀。

その光秀が武将飯として食べていたといわれるのが、あやべも含む丹波の猪肉です。当時は焼いて食すのが主流だったといわれますが、気温がグッと下がってくるこれからの季節は鍋（ボタン鍋）も美味、おすすめです。あやべの料亭や旅館などでもおいしくいただけますが、当地まで足を運ぶのが難しいという方は、ぜひ、綾部市の「ふるさと納税」をご検討ください。綾部市を応援しながら返礼品として猪肉と味噌ダレセットを受け取ることが可能です。

